

2023年2月19日 主日礼拝

説教題「『良い土地』とはどんな土地か？」マタイ福音書13章1～9節

主任牧師 加藤 誠

「ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった」(マタイ13章節)

イエス・キリストは神の御言葉を私たちに手渡すために、しかも、あたたかなぬくもりがあり、手ごたえのある、生きた御言葉の働きを教えてくださいのために、インマヌエルの主として生きてくださいました。

そのイエス・キリストが語られた「種を蒔く人のたとえ」を今読みましたが、たとえは読む人によっていろいろな理解が可能です。このたとえも「種蒔きのたとえ」「四種類の土地のたとえ」とか、「種まく人のたとえ」というように、このたとえのどこに焦点を置いて読むかで、その見出しも変わってきます。

このたとえ話に出てくる「種」とは神の御言葉であり、「種を蒔く人」はイエス・キリストのことでしょう。ですから「種」である神の御言葉の働きに焦点をおいて読むことも出来るし、私たちに神の御言葉を今日も届け続けておられるイエス・キリストに焦点をおいて読むことも出来るのですが、今日はここに出てくる「四つの土地」、すなわち「道端」「石ころだらけの土地」「茨の生えている土地」「良い土地」に焦点を当てて読んでみたいと思います。これらの「土地」は神の御言葉を受け取る私たちのことです。ただし「道端」「石ころ」「茨」「良い土地」という四種類の人がいるわけではなく、神の御言葉に対する私たちの姿勢、心の状態をあらわしています。

- ・「道端」…神の御言葉に完全に背を向けて、まったく受け取ることすらしめない。固く心を閉ざして、そっぽを向いてしまっていないか？主イエスはドアの向こうで待っておられるのに、ドアを開けようとすらしめない。そういう状態のことです。
- ・「石ころだらけ」…礼拝に集い、聖書を開き、神の御言葉を喜んで聴くのです。けれども根が伸びない。聴くけれど、自分の栄養にはならない。何か困難が起これると、聖書を読む気にならなくなる。教会に集う気も失う。そういう状態のことです。
- ・「茨」…聖書の福音は大切なものだとわかる。人が生きていくのに、神の愛は無くならないものだとわかる。けれども、この世の中、それだけでは生きていけない。やっぱりお金が大切。やっぱりこの世の力は大切。聖書もいいけど、もっと楽しいこともあるし…という状態のことです。

「道端」も「石ころだらけ」も「茨」も、どれもが、わたしの中にあることを認めざるを得ません。聖書を読むことも、祈ることも大切だと分かっている。だけど長続きしない。礼拝を休めたら、いろんな楽しそうなことができるのに…と思う。そういう実態を抱えた自分に「良い土地」と言われても、なんて難しいのだろう…と

しか思えない。自分と「良い土地」との間の深いギャップを示されて終わる…というのが、これまでのわたしの読み方でした。

けれどもある時、「良い土地なんて最初からあるわけじゃないじゃないですか！」という農家の方の言葉にハッとさせられました。「最初から柔らかく、石ころ一つない、茨のような雑草も生えていない土地なんてあるわけじゃない」。栄養分を含んだ良い土ほど雑草がよく生える。毎日鍬を入れ、石を取り除き、雑草を抜く。そうやって毎日手間をかけないと良い土地は保てないのだと。だとするなら、今日の自分の状態が「良い土地」とはかけ離れているなあと思うだけで、この「たとえ話」を終わらせてしまっただけじゃないのです。今日の自分が「道端」であるならば、わたしの頑なな心にどうか、あなたの鍬を入れて柔らかくしてください…と祈る。確かに私の中には「石ころ」がたくさんあり、「茨」がたくさん生えているけれど、だからこそ、神さま、あなたの御言葉が命をもっていること、わたしが生きるためになくてならない力と希望であることを教えてください…と祈りながら、少しでも聖書を開き、御言葉が自分の根っこになっていくことを祈り求めていく。その小さな祈りの積み重ねを、主イエスは期待しておられるのではないのでしょうか。

先週の日曜日は、北九州の豊前教会の献堂式に参加させていただきました。豊前市は人口2万6千人の小さな町です。1953年に一人の信徒が自宅を開放して礼拝が始まり、60年かかって教会になった群れです。この2月でちょうど70周年ということで、午前中の礼拝では教会の歩みがスライドで紹介されました。70年間に本山牧師を含めて7人の牧師が立てられましたが、専任牧師がいたのは約40年であり、約30年は専任牧師がおらず、信徒だけで礼拝が守られたそうです。それは大変な闘いであったと想像します。数人しか信徒がいない状態で、「もう聖書を読むのは止めよう」「教会に行くのは止めよう」と思ったことは一度や二度ではなかったのではないかと。しかし「それでも聖書」から励ましをいただき、インマヌエルの主が共に歩んでくださる希望を握りしめて、「やっぱり教会」と主の日の礼拝を選び取り続けた。そこに数人、いや一人ひとりの信徒の信仰の闘いがあったからこそ、「道端」であり「茨」が生え「石ころだらけ」の土地が「良い土地」に耕されて、百倍、六十倍、三十倍の祝福と喜びの出来事が起こされていったのです。

最初から豊かな実を結ぶクリスチャンはいません。御言葉に生きようとして挫折し、祈りを大切にしようと思えば誘惑に負けてしまう情けない日々の繰り返し。それでも私たちを覚えて祈り、御言葉の種を蒔き続けてくださる主イエスの愛になげられて御言葉の前に座り直す。「教会も結局は罪人の集まりじゃないか！」と失望してはもう一度主日礼拝に戻ってくる。「それでも聖書、やっぱり教会」。主イエスの祈りに支えられて、雑草と石だらけの土が耕される出来事を重ねながら、共に教会として建てられていきたいのです。